

氏名	猪上 亜美
学位の種類	博士(造形)
学位記番号	博第25号
学位授与日	平成29年9月30日
学位授与の要件	学位規則第3条第1項第3号該当
論文題目	鳥獣画屏風に見る日本画表現の考察と、現代における屏風と日本画の可能性について
審査委員	主査 武蔵野美術大学 教授 西田 俊英 副査 武蔵野美術大学 教授 尾長 良範 副査 武蔵野美術大学 教授 玉蟲 敏子 副査 泉屋博古館分館 分館長 野地 耕一郎

内容の要旨

本研究の目的は大きく二つある。

ひとつは申請者が修士課程より研究を重ねてきた鳥獣画について、先人の残してきた鳥獣画の技法・表現・意義を博士課程で研究考察し、それをふまえた上で自身にとっての鳥獣画の意義・表現についても深く掘り下げ考察し、それらを作品に発展させ自己の表現をより高めていくことである。

もうひとつは、美術館での日本画の鑑賞だけではなく、生活の中で多くの人に日本画を認識し親しんでもらいたいという観点から、調度と芸術の両方の性質を兼ね備え、簡単に折り畳め持ち運びのできる等の特質を持つ屏風に着目し、申請者の研究する鳥獣画と合わせ鳥獣画屏風を制作し、試みとして一般住宅や人々の集まる空間に展示を行い、日本画の可能性について考察していくことである。

本研究は二部構成とし、第1部は先人の残した鳥獣画として、長澤蘆雪(1754～1799年)の「黒白図」(1792～1799年、エツコ&ジョー・プライスコレクション)をとりあげ考察していく。第1章では、「黒白図」のモチーフ(白象、黒牛、鳥、白犬)と、狩野派を中心に描かれてきた「二十四孝図 大舜」の基本モチーフ(白象、黒象、鳥、大舜)との、白象と黒白という共通点に着目し、「黒白図」は「二十四孝図 大舜」の見立て、すなわちなぞらえたものであるという仮説を提示する。まず第1節で、先行研究を整理、検討し、次に第2節で「二十四孝図 大舜」の概要と、狩野派を中心としたその表現について述べ、第3節で「黒白図」に描かれた鳥獣一つ一つを考察し、さらに見立ての方法を具体的に分析することで、提示した仮説を論証していく。また第4節においては長澤蘆雪の「黒白図」を含む象の表現について触れる。第2章では、「黒白図」の屏風としての意義について述べていく。第1節では、「黒白図」が屏風を前提として描かれたことを検

証し、第2節では、「黒白図」の対比等の画面構成やその表現から、人々を楽しませる観賞性と、芸術作品としてもすぐれている鑑賞性という二つの性質を併せ持つことについて述べていく。

第2部は、第1部の考察をふまえ、申請者自身の鳥獣画屏風の制作について論じる。鳥獣の意義、屏風の意義を考察しながら、それを自己の表現にどう活かしていくかを探究するものである。第1章は平面作品とは違う屏風独自の制作過程を確認する。第2章は多くの人に日本画を認識し親しんでもらうという目的に沿い、人々の生活の中で現在も行われている2つの屏風祭り（京都祇園祭の屏風祭、高知県香南市赤岡町の土佐絵金祭りと須留田八幡宮神祭）の取材と、一般住宅で屏風を展示した試みを通して屏風の特質や可能性について考察する。第3章は第1部と第2部第1・2章の研究結果をふまえて自己の鳥獣画屏風を制作し、「蘭鑄」、「悠久」、「笑鰐」、「紅金剛一瞥」、「呼応」、「猿山」、「めぐる」の各作品に描かれた鳥獣の意義を深く掘り下げ、屏風であることを活かしたその表現について述べていく。特に「めぐる」に関しては、描かれた黒白の世界を対比としてだけでなく、すべてつながり循環している世界として表現し、申請者なりの黒白について考察したものであり、また人々が多く行きかうパブリックスペースにこれを設置し、展示も含めて本研究のまとめとしたものである。

そして最後に結論として、第1部と第2部を統括し、今後も申請者の目指す鳥獣画表現とは何かを追求し、またそれを屏風に反映させることで、どのような表現や展示の可能性があるか、鳥獣画屏風と日本画の可能性について考察していく。

審査結果の要旨

論文の概要

提出された論文は、学位申請者の猪上亜美が修士課程より表現の研究を重ねてきた鳥獣画について、二部構成で論じたものである。論文の目指すところは、表現、技法を研究したうえで、鳥獣画の意義について歴史的に掘り下げ、その成果を自作品に反映させ、より表現を高めていくことにある。本研究では、とくに調度と芸術の両方の性質を兼ね備え、持ち運びのできる屏風に着目し、新しい表現の場をもとめて、多様な空間での展示を試みていることも日本画の可能性の探求として評価される。

第一部においては、長澤蘆雪の「黒白図」（エツコ&ジョー・プライスコレクション）をとりあげ、描かれた黒白の鳥獣について、中国・元代に編纂され、江戸時代に広く普及した「二十四孝図大舜」の暗喩や換喩などの置換方法による複雑な見立てとして解釈し、併せて当時の伝統的な概念と新しい概念とを融合させた蘆雪の表現等について考察している。また平面作品とは違う屏風独自の制作工程を修得し、多くの人に日本画を認識し、親しんでもらうという目的に沿い、現在も行われている屏風祭りの現地を取材し、現代にお

ける屏風、その展示の可能性についても研究を進めている。

第二部においては、作品について論じている。申請者がすべての作品に一貫して伝えたいと考えたことは、鳥獣の持つ命のエネルギーであり、ひたむきに生きる鳥獣の存在そのものである。それらを表現しようとした時、屏風という形態は非常に有効であると認識し、「蘭鑄」では屏風の折れる構造を活かし、飛び出すような立体感を出している。「悠久」では屏風の屈折によって左右が交わることで、そこに時の流れを表現した。「笑鰐」と「紅金剛一瞥」は一つの屏風の表と裏に描き、対の表現を取っている。そして、最終提出作品の「めぐる」は太陽の動きに合わせて円形に展示し、黒と白は繋がり、めぐっているという、対比だけではない循環する意味を画面に表現した。

山折谷折による立体感やリズム、自立してどこにでも置くことができるという屏風の特質によって、鳥獣の姿や世界、存在感を強調することができ、意味を持つ生命として表現できている。

今後も屏風による鳥獣画表現の研究を彫り下げて続けてもらいたい。

審査の経緯

猪上亜美の博士論文審査委員会は、平成29年7月10日に開催された。審査に先立ち、2号館512教室に於いて公聴会を開催し、屏風作品の展示及び口頭発表を行った。

公聴会の展示会場には研究論文を基盤として作品制作された鳥獣画屏風を自立可能な特性を活かした構成で、会場内の床面に直接設置し、屏風の形態を有効に試みた演出となった。

先ず論文内容についてプレゼンテーションを行った後に、展示作品を申請者本人が一点ずつ説明し、公聴会出席者は説明を聞きながら会場を巡回した。最後に、今回の本論文の「黒白図」の結論を、表現の世界に発展させた「めぐる」六曲一双の作品について解説した。屏風の蝶番は山折谷折りのどちらの方向にも折ることが出来る応用性を活かし、右隻と左隻の両方画面を外側に向けて十二面体の連続する円柱の形に置いて展示し、円形の外側を時計回りに回って観ると、一日の時の流れがずっと続くような時間の経過が表現され、鑑賞者は作品側面を巡る内に、生命の循環する輪廻転生の表現と深く繋がっていることに気付かされる。

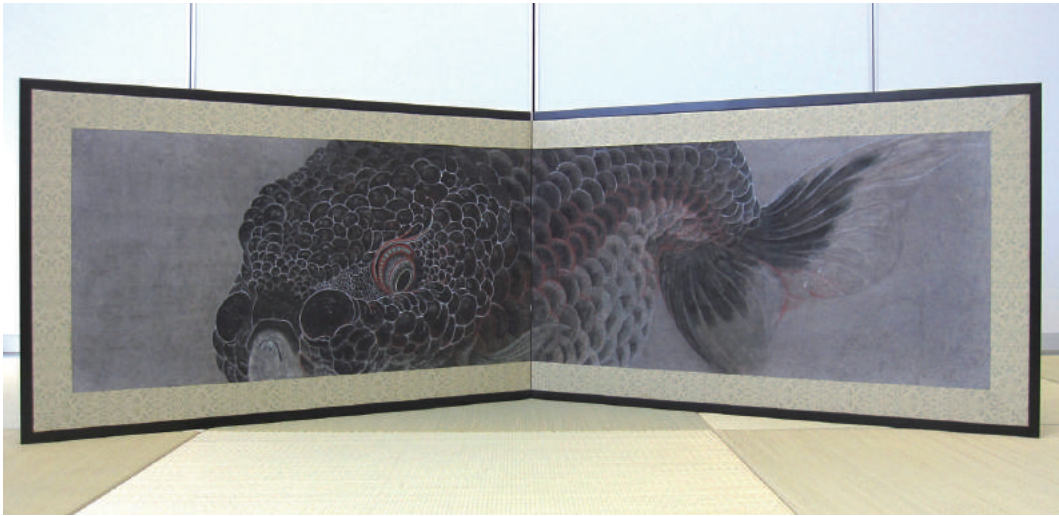
公聴会の質疑応答では出席者からも幾つかのコメントがあり、屏風の視覚効果の面白さ、油彩とは違う空間の捉え方と時間の流れや移動を画面上に表出しているといった意見や、パブリックスペースの駅や空港、病院等での多角的な屏風の展示の仕様、多様性への試みを空間演出の専門家の意見も取り入れると、新たなコラボレーションへの可能性が期待できるのではないか、また外国で屏風の制作から展示までのワークショップを行い、屏風の優れた点を共有することを通じて、積極的に世界へ視野を広げてはどうかといった意見や感想が寄せられた。

続いて2号館513室において審査委員4名により審査委員会を開始し、申請者本人への質疑応答を経て、申請者が退室後に協議がなされた。審査委員会では、作品制作と論文において優れた内容を持っていることが確認され、博士の学位の授与するにふさわしいものとの結論に至った。全員一致で合格と判定した。

以下、審査委員会での評価を記載する

- ・申請者による、長沢蘆雪の「黒白図」と「二十四孝図大舜」を関連づけ、暗喩や換喩などの置換方法の複雑な見立てとしての解釈する仮説は、先行研究が辻惟雄氏などの展覧会の図録の解説のように、黒と白、大と小、静と動のような対比の妙や視覚効果、大胆な構図の面白さなどが指摘されるにとどまってきた現状をはるかに超える、斬新な発想をもつ新知見としての意義のあるものと評価される。
- ・近年、江戸美術史における曾我蕭白についての新しい研究には、画面に隠された古典的伝説や物語、比喩的な思想を背景とした図像の解釈を試みる傾向が表れており、今回の猪上による掘り下げた作品研究も、同世代の美術史研究者と比較しても遜色ない新知見に富んだ新しさをもっている。作品制作と論文に真摯に迫った武蔵野美術大学の美術専攻の学生であるからこそ成し遂げられた成果であり、今後、江戸美術史を書き変える可能性を秘めた論文として高く評価される。
- ・ポルトガル語では、屏風のことをBIOMBO（ビョンボ）といい、安土桃山時代において花形の輸出品であった。屏風の表具や表装、調度を含めた美術の流れを歴史的に論じたものは少ないので、今後の研究が期待される。
- ・屏風の設えに対し、負担のない絵の具の塗り方などの技法研究をした上で、日本画の制作、そして文化財保存修復の半田昌規先生に屏風に関して基礎から指導いただき学び、裏打ち、屏風の骨縛り、蓑掛けと、下張りから何層にも続く工程へと日本画の持っているあらゆる構造を、ある程度熟知していないとできないことであり、自作の屏風の7点を、ほぼ自力のみで完成させたことは、言葉でいう以上に困難な作業を伴ったと推測されるが、それだけに描画の研究のみに留まらず、表具、装飾、日本画の空間構成の多様さなど、広範囲の研究に至り、それだけに意義深いものとなった。
- ・屏風形式の中に、ややもすると収まりすぎていたものが最終提出の「めぐる」において伸びやかな生命力を与え、画面に永遠性を秘めた輪廻のダイナミックさが展開され、屏風をして屏風を超える表現へと昇華された作品となった。

以上、論文作品、最終試験の審査の結果、審査委員全員一致で本研究の新知見、論述内容と形式について優秀であると認め、武蔵野美術大学の博士（造形）の学位を授与するにふさわしいと判定した。



蘭鑄

2014年 雲肌麻紙、水干絵具、岩絵具、墨 513 × 1694mm



悠久

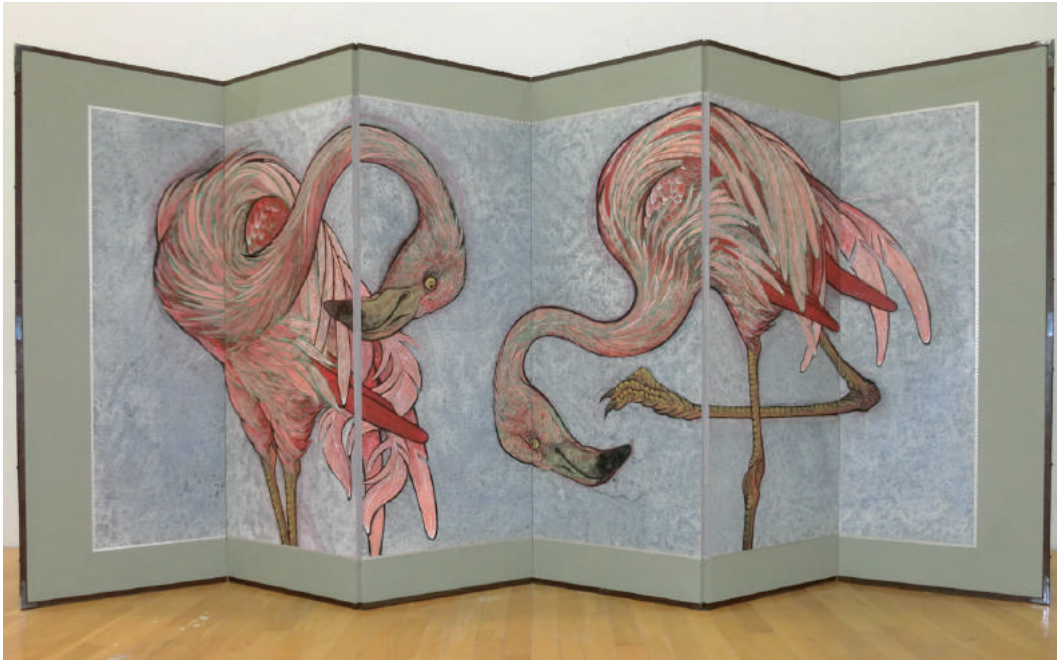
2015年 雲肌麻紙、水干絵具、岩絵具、墨、金箔 513 × 1694mm



笑鱐
2015年 高知麻紙、水干絵具、岩絵具、墨 1400 × 2400mm



紅金剛一瞥
2016年 高知麻紙、水干絵具、岩絵具、墨 1400 × 2400mm



呼応

2015年 高知麻紙、水干絵具、岩絵具、墨 1690 × 3720mm



猿山

2016年 高知麻紙、水干絵具、岩絵具、墨 1920 × 3060mm



めぐる

2017年 雲肌麻紙、水干絵具、岩絵具、墨 1800×4800mm 六曲一双